

Title	Dirichlet問題の固有値と境界変動 (幾何学と大域解析学)
Author(s)	藤原, 大輔
Citation	数理解析研究所講究録 (1979), 352: 1-15
Issue Date	1979-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/104402
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Dirichlet 問題の固有値と境界変動

東大 理

藤原大輔

序

$\Omega \subset \mathbb{R}^2$ を滑らかな境界をもつ有界領域とする。
その境界を γ とする。2次元の Dirichlet 問題の固有値
問題と考える。

$$(1) \quad \begin{cases} (-\Delta - \lambda) u(x) = 0 & x \in \Omega \\ u|_{\gamma} = 0 \end{cases}$$

$0 < \lambda_1 \leq \lambda_2 \leq \lambda_3 \leq \dots$ と, (1) の固有値を λ_j と
しこれらは領域 Ω の汎関数である。簡単のため、以後 Ω
は単連結とする。そして、 λ_j は Ω の境界 γ の汎関数であ
るとして表す。かかる λ_j の条件は、可分な Hilbert 多様体
 Γ を成す。 Γ の部分集合 B が residual であるとは、
開かつ稠密な可算個の集合の共通集合となることである。

私は、谷川政雄氏、豊田修一氏と得た結果を紹介する。

定理 1, Γ のある residual な部分集合 B が

ある。 $\forall \gamma \in B$ の形 (2. (1)) の固有空間は、可逆して
1次元にたどるようになる。

これは、領域が対称性を持つ、極く一般の型をい
いするならば、すべての固有値が単純であることが示されている。
同様の結果は、Uhlenbeck [4] によつて、ポリアポル
振動の場合とか、Riemann空間内の Laplace-Beltrami 作用素
によつて、計量が振動される場合によつて知られている。

定理 1 は、より強い形で Arnold [1] に予想が述べられて
いる。

§1. 境界の作る Hilbert 多様体 Γ .

$S^1 \in \mathbb{R}^2$ の単位円周 $= \{e^{i\theta} \mid 0 \leq \theta < 2\pi\}$ とする。

Γ を、埋め込み:

$$S^1 \times S^1 \longrightarrow \mathbb{R}^4$$

の作る Hilbert 多様体とする。但し、 $x_1(\theta), x_2(\theta)$ は、
Sobolev 空間 $H^5(S^1)$ の元とする。Sobolev の
埋蔵定理によつて、 $x_1(\theta), x_2(\theta)$ は C^4 級である。 Γ
上の距離を

$$(1.1) \quad \rho(\sigma, \sigma') = \left(\|x_1 - x_1'\|_5^2 + \|x_2 - x_2'\|_5^2 \right)^{\frac{1}{2}}$$

で定義する。 $\|\cdot\|_5$ は Sobolev 空間 $H^5(S^1)$

この Sobolev norm である。

$\gamma \in \Gamma$ は C^4 級の simple Jordan curve を定義する。
 従って, \mathbb{R}^2 の単連結領域 δ_γ を囲む。 γ への単位外法
 線ベクトル場を $\nu(\theta)$ とする。 γ の ϵ 近傍は, Tubular
 neighborhood theorem が成立するから, ある $\epsilon(\gamma) > 0$
 が存在して, 任意の $\gamma' \in \Gamma$ で $\rho(\gamma, \gamma') < \epsilon(\gamma)$ とするとき
 の γ' 近傍は,

$$(12) \quad \omega_{\gamma'} : \bar{\delta}_\gamma \longrightarrow \bar{\delta}_{\gamma'}$$

と C^4 級の微分同相が存在する。 $\epsilon > 0$ として, $\omega_{\gamma'} \in \gamma$ の
 制限 $\omega_{\gamma'}|_{\gamma}$ は $\gamma \rightarrow \gamma'$ に一致するとしてよい。 さらに,
 必要ならば, $\epsilon(\gamma)$ をさらに小さくして, $(\gamma, \gamma') \rightarrow \omega_{\gamma'}$
 は, C^4 級であると仮定してよい。 従って, $\gamma_t : t \in [0, 1]$
 が Hilbert 多様体 Γ 上の $\gamma \equiv \gamma_0$ を通る曲線とすると,
 1 -パラメータの微分同相族 $\{\omega_{\gamma_t}\}_{t \in [0, 1]}$ を得る。

$\forall x \in \bar{\delta}_\gamma$ において,

$$(13) \quad X(x) = \frac{\partial \omega_{\gamma_t}(x)}{\partial t} \Big|_{t=0}$$

と置く。 $X(x) = (X_1(x), X_2(x))$ は $\bar{\delta}_\gamma$ 上の vector 場であ
 る。 ω_{γ_t} は, (γ, γ') に対し一意的に定まるから, 従
 って vector 場 $X(x)$ は γ_t によって, 一意的に定まるわけ
 ではない。 (しかし, γ の γ への制限, $\delta\gamma(0) = X(\delta(0))$)

は、 γ に δ によって、定まる。さらに、 $\delta\gamma(0)$ の法線方向の成分

$$(0.4) \quad \langle \delta\gamma(0), \nu_a \rangle = \langle X(\sigma(0)), \nu_a \rangle$$

をとることにすると、 S' のパラメータ t の取り方による多様性もなくなる2ことが出来る。かくて、Hilbert 多様体 Γ の γ における接ベクトル空間 $T_\gamma \Gamma$ として

$$T_\gamma \Gamma = \{ \langle \delta\gamma(0), \nu_a \rangle = \langle X(\sigma(0)), \nu_a \rangle, \\ 1. X(\gamma(0)) \in H^5(S') \times H^5(S') \}$$

と同一視することが出来る。

§2 Main theorem の証明

$\gamma \in \Gamma$, \mathcal{B}_γ を上述の如くとする。問題1を考えると $\mathcal{B} = \mathcal{B}_\gamma$ となる。多様体 Γ は separable であるから、定理1は局所化出来る。

Theorem 1' $\forall \gamma \in \Gamma$ に対して、ある開近傍 $U(\gamma)$ が存在して、その residual 分解 $\mathcal{B}(\gamma)$ があり、 $\forall \gamma \in \mathcal{B}(\gamma)$ に対して、 \mathcal{B}_γ で与えられた問題(1)の固有空間は可べ2次元以下である。

定理1'の証明を、ケッチする。 $g_\gamma(x, x')$ を \mathcal{B}_γ における, Dirichlet 問題のグリーン関数とする。グリーン

作用素 G

$$(2.1) \quad G_{\gamma} u(x) = \int_{\Omega_{\gamma}} g_{\gamma}(x, x') u(x') dx'$$

で定義する. 固有値問題 (1) は, G_{γ} を用いて

$$(2.2) \quad (\lambda G_{\gamma} - I) u(x) = 0$$

に変換される. 微分方程 (1.2) を用いて, $L^2(\Omega_{\gamma})$ の元 $u(x)$

をこれに代ると $\Omega_{\tilde{\gamma}}$ 上の関数 \tilde{u} と見做す.

$$\omega_{\tilde{\gamma}}^{T*} u(x) = \tilde{u}(\omega_{\tilde{\gamma}}^T(x)) \in L^2(\Omega_{\tilde{\gamma}})$$

である. $\tilde{u}(x) = \omega_{\tilde{\gamma}}^{T*} u(x)$, $\tilde{v}(x) = \omega_{\tilde{\gamma}}^{T*} v(x)$ とすると
内積の変換は,

$$(2.3) \quad \int_{\Omega_{\gamma}} u(y) v(y) J_{\tilde{\gamma}}^T(y) dy = \int_{\Omega_{\tilde{\gamma}}} \tilde{u}(x) \tilde{v}(x) dx.$$

である. $J_{\tilde{\gamma}}^T(y)$ は $\omega_{\tilde{\gamma}}^{T*}$ の Jacobian 行列式である.

(2.2) は

$$(2.4) \quad (I - \lambda G_{\tilde{\gamma}}^T) \tilde{u}(x) = 0,$$

where $\tilde{u}(x) = (\omega_{\tilde{\gamma}}^{T*} u)(x)$ and $G_{\tilde{\gamma}}^T = \omega_{\tilde{\gamma}}^{T*} G_{\gamma} (\omega_{\tilde{\gamma}}^{T*})^T$.

(2.4) を, 固定した Hilbert 空間 $L^2(\Omega_{\tilde{\gamma}}) = \mathcal{H}_{\tilde{\gamma}}$ で考えれば

よい. $\mathcal{E} = \mathcal{E}_{\tilde{\gamma}}$. $\mathcal{H}_{\tilde{\gamma}}$ の単位球 \mathcal{E}

$$\mathcal{E} = \left\{ \tilde{u} \in L^2(\Omega_{\tilde{\gamma}}) ; \int_{\Omega_{\tilde{\gamma}}} |\tilde{u}(x)|^2 dx = 1 \right\}.$$

とかく.

6

⑤ も可分の Hilbert 多様体である。

次のような写像を考える。

$$(2.5) \quad \Phi; U(\mathcal{F}) \times \mathbb{S} \times \mathbb{R} \longrightarrow \mathcal{H}_F$$

$$(\gamma, \tilde{u}, \lambda) \longrightarrow \bar{\Phi}(\gamma, \tilde{u}, \lambda) = (\tilde{u} - \lambda G_F^\gamma \tilde{u})$$

さらに, ここでは γ を固定し, 次の写像を考える。

$$\Phi_\gamma; \mathbb{S} \times \mathbb{R} \longrightarrow \mathcal{H}_F$$

$$(\tilde{u}, \lambda) \longrightarrow \bar{\Phi}(\gamma, \tilde{u}, \lambda).$$

これはつりつ。

命題 1. 上の写像 Φ_γ は C^+ 級の Fredholm 写像で, その指数は 0 である。

さて, $(\gamma, \tilde{u}, \lambda) \in U(\mathcal{F}) \times \mathbb{S} \times \mathbb{R}$ をとる。写像 Φ の二階導関数の接写像は,

$$(2.6) \quad \delta \bar{\Phi}(\gamma, \tilde{u}, \lambda) = \delta \lambda G_F^\gamma \tilde{u} + (1 - \lambda G_F^\gamma) \delta \tilde{u} + \lambda (\delta G_F^\gamma) \tilde{u}$$

である。 $\delta \tilde{u} \in T_{\tilde{u}} \mathbb{S}$ は,

$$(2.7) \quad \int_{\mathcal{M}_F} \tilde{u}(x) \delta \tilde{u}(x) dx = 0$$

を満足する。(2.6) 式の最後の項は, 境界の変動 $\delta \gamma(\theta)$ で生じる変動に相当する。この部分は, きちんと計算される。

命題 2 (Hadamard's variational formula).

任意の $u \in L^2(\partial\Omega_r)$ に対し,

$$(2.8) \quad (\omega_r^{\sigma^*})^{-1} (\delta G_r^\sigma) \omega_r^{\sigma^*} u(y) = V_{\delta r} u(y)$$

と表わす,

$$(2.9) \quad V_{\delta r} u(y) = - \int_{\partial\Omega_r} \left(\frac{\partial g_r(y, r(\theta))}{\partial r_\alpha} \frac{\partial g_r(r(\theta), y')}{\partial r_\alpha} \langle X(r(\theta)), \nu_\theta \rangle d\sigma_\theta u(y') \right) dy' \\ + \langle \text{grad } G_r u(y), X(y) \rangle - G_r(\langle X, \text{grad } u \rangle)(y).$$

ここで $d\sigma_\theta$ は σ の線素で, $\langle X(r(\theta)), \nu_\theta \rangle \in T_r \Gamma$.

つまり我々 17 次の定理を証明する.

定理 2: $h_y \ni 0$ は, 写像

$$\Phi; U(\tilde{r}) \times \mathbb{S} \times \mathbb{R} \longrightarrow h_y$$

の regular value である.

証明. $\Phi(r, \tilde{u}, \lambda) = 0 \in h_y$ と仮定する. 可

と,

$$(2.10) \quad (I - \lambda G_r^\sigma) \tilde{u} = 0,$$

$$u(\lambda) = (\omega_r^{\sigma^*})^{-1} \tilde{u} \quad \text{と置く.}$$

$$(2.11) \quad (I - \lambda G_r) u = 0 \quad \text{in } L^2(\partial\Omega_r)$$

証明すべきことは、 $\delta\Phi(r, \tilde{u}, \lambda)$ の像が、 $\mathcal{H}_y = L^2(\partial\Omega)$ と一致するということである。それには $\delta\Phi(r, \tilde{u}, \lambda)$ の像が稠密であることを示せばよい。 $\tilde{v} \in \mathcal{H}_y$ が $\int_{\Omega} \delta\Phi(r, \tilde{u}, \lambda) \tilde{v} dx$ と直交すると仮定する。すると

$$(2.12) \quad 0 = \delta\lambda \int_{\Omega_r} G_r^\delta \tilde{u}(x) \tilde{v}(x) dx + \int_{\Omega_r} (I - \lambda G_r^\delta) \delta\tilde{u}(x) \tilde{v}(x) dx \\ + \lambda \int_{\Omega_r} (\delta G_r^\delta) \tilde{u}(x) \tilde{v}(x) dx.$$

である。したがって、 $\delta u \in T_{\tilde{u}} \mathcal{C}$ である。この条件は、

$$(2.13) \quad \int_{\Omega_r} u(y) \delta u(y) J_{\tilde{r}}^\delta(y) dy = 0$$

$\delta\tilde{u} = (\omega_r^*)^{-1} \delta u$ である。(2.12) 式は、次の三つの連立方程式系と同値である：

$$(2.14) \quad \int_{\Omega_r} u(y) w(y) dy = 0$$

$$(2.15) \quad \int_{\partial\Omega_r} (I - \lambda G_r^\delta) \delta\tilde{u}(y) w(y) dy = 0$$

$$(2.16) \quad \int_{\partial\Omega_r} V_{\delta r} u(x) w(x) dx = 0$$

ここで、

$$(2.17) \quad w(y) = (\omega_r^*)^{-1} \tilde{v}(y) J_{\tilde{r}}^\delta(y).$$

とあり得る。

$\delta \tilde{u}$ は, 条件 (2.13) を満たす任意の関数であるから,

(2.15) より, $C \in \mathbb{R}$ とし,

$$(2.18) \quad (I - \lambda G_r) w(y) = C u(y) J_r^{\tilde{r}}(y).$$

$I - \lambda G_r$ の対称性を用いると, 任意の $u \in \ker(I - \lambda G_r)$ に対し,

$$0 = \int u(y) (I - \lambda G_r) w(y) dy = C \int |u(y)|^2 J_r^{\tilde{r}}(y) dy$$

これから, $C = 0$ が得られる。従って,

$$(2.19) \quad (I - \lambda G_r) w(y) = 0$$

つまり $w \in C^1(\bar{\Omega}_r)$ で

$$(2.10) \quad \begin{cases} (-\Delta - \lambda) w(y) = 0 & \text{in } \Omega_r \\ w|_{\partial \Omega_r} = 0 \end{cases}$$

が成立する。(2.11) と (2.16), (2.19) を用いると

$$(2.21) \quad \lambda^{-1} \int \frac{\partial u}{\partial \nu_a}(r|a) \frac{\partial w}{\partial \nu_a}(r|a) \langle X(r|a), \nu_a \rangle d\sigma_a = 0$$

$\langle X(r|a), \nu_a \rangle = \delta r|a$ は任意であるから, $u \neq 0$ に対し

$$(2.22) \quad \frac{\partial w}{\partial \nu_a}(r|a) \equiv 0$$

が, Ω_r の内界面上で成立する。これは (2.19) と (2.22) より

すなわち, Aronson's 定理を用いると $w(y) \equiv 0$

on $\bar{\Omega}_r$ が言える。従って, $\psi(\lambda) \equiv 0$ 。定理 2.1

が示される。

定理 1' は, この定理 2 と Ullrich [4] の横断性定理 2 によって示される。

§ 3 Hadamard 変分公式の証明の又々, 4.

前節で用いた Hadamard 変分公式は, Hadamard [5] によって述べられたが, そこにおける証明は, $f(\theta) = \langle X(\theta_0), \theta \rangle$ が, 正又は負の定符号のときのみしか有効でない。その後厳密な証明は, 幾通りも得られてはいるが, (例えば [6] [7] [8]) のどれも単純ではなく, Hadamard の最初の証明の着想に比べると, 不満を感じる。最近, 筆者は, 小沢真氏と協力して, Hadamard の最初の着想も, 極めて少くは修正すれば, 殆んど, Hadamard の最初の着想の予予の $f(\theta)$ が符号も変えず一般の場合も, Hadamard の公式が証明されることを指摘した [7]。ここでは, それに少し触れてみたい。もう一度状況を明確にしよう。

Ω を \mathbb{R}^2 の有界領域で, $\partial\Omega = \gamma$ でその境をあらわす。 $f(x)$ を γ 上で定義された C^∞ の実関数とする (γ は C^∞ としておく。) ν_x を $x \in \gamma$ での γ の外単位法線とする。 $\varepsilon \geq 0$ に対して

$$\gamma_\varepsilon = \{x + \varepsilon f(x) \nu_x; x \in \gamma\}$$

は、 ε が十分小さければ、ある有界領域 $\partial\Omega_\varepsilon$ を囲む。

$g_\varepsilon(x, y)$ を $\partial\Omega_\varepsilon$ における Dirichlet 問題のグリーン関数とする。即ち

$$(3.1) \quad \begin{cases} \Delta_x g_\varepsilon(x, y) = -\delta(x-y) \\ g_\varepsilon(x, y)|_{x \in \partial\Omega_\varepsilon} = 0 \end{cases}$$

ε が小さくなるにつれて、Hadamard の変分公式は、次のように近づくことが出来る。(これは §2 と多少形が違ってくるが、Hadamard のもとの公式の形がよい。)

定理 3.1 (Hadamard's variational formula)

$x, y \in \Omega$, $x \neq y$ に対して

$$(3.2) \quad \begin{aligned} & \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \varepsilon^{-1} (g_\varepsilon(x, y) - g_0(x, y)) \\ &= \int_{\partial\Omega} \frac{\partial g_0(x, z)}{\partial \nu_z} \cdot \frac{\partial g_0(y, z)}{\partial \nu_z} f(z) d\sigma_z \end{aligned}$$

ここで、 $d\sigma_z$ は $z \in \partial\Omega$ での $\partial\Omega$ の線素。

証明. $y \in \Omega$ を固定する。 $g_0(x, y)$ を x の関数と思えば、 $\bar{\Omega} - \{y\}$ で C^∞ 関数である。したがって、Whitney の拡張定理により、 $g_0(x, y)$ を $\mathbb{R}^2 - \{y\}$ に

C^∞ に拡張し、 $\tilde{g}_0(x, y)$ とおく。

$$\Delta_x \tilde{g}_0(x, y) = \delta(x-y) + h(x, y)$$

が、任意の $x \in \mathbb{R}^2 - \{y\}$ で成立する。但し $h(x, y)$ は $x \in \mathbb{R}^2$ の C^∞ 関数で、 $x \in \bar{\Omega}$ のとき $h(x, y) \equiv 0$ である。すなわち、任意の x に対して

$$\left| \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^{\alpha} h(x, y) \right| \leq C_{\alpha} |\text{dist}(x, \partial\Omega)|^2$$

という式が成立する。 $\text{dist}(x, \partial\Omega)$ は x と $\partial\Omega$ の距離。

C_{α} は正定数。 Green-Stokes の公式から、 $x, y \in \Omega$ のとき

$$\begin{aligned} & g_{\epsilon}(x, y) - g_0(x, y) \\ (3.3) \quad &= \int_{\partial\Omega_{\epsilon}} (\Delta_z g_{\epsilon}(x, z) \tilde{g}_0(z, y) - \Delta_z \tilde{g}_0(z, y) g_{\epsilon}(x, z)) dz \\ &+ \int_{\partial\Omega_{\epsilon}} h(z, y) g_{\epsilon}(x, z) dz \\ &= \int_{\partial\Omega_{\epsilon}} \left(\frac{\partial g_{\epsilon}(x, z)}{\partial \nu_z^{\epsilon}} \tilde{g}_0(z, y) - \frac{\partial \tilde{g}_0(z, y)}{\partial \nu_z^{\epsilon}} g_{\epsilon}(x, z) \right) d\sigma_z^{\epsilon} \\ &+ \int_{\partial\Omega_{\epsilon} - \bar{\partial\Omega}} h(z, y) g_{\epsilon}(x, z) dz \\ &= \int_{\partial\Omega_{\epsilon}} \frac{\partial g_{\epsilon}(x, z)}{\partial \nu_z^{\epsilon}} \tilde{g}_0(z, y) d\sigma_z^{\epsilon} + \int_{\partial\Omega_{\epsilon} - \bar{\partial\Omega}} h(z, y) g_{\epsilon}(x, z) dz \end{aligned}$$

ここで、 $d\sigma_\varepsilon$ は γ_ε の線素をあらわす。このおりの等式では、(3.1) 式の境界条件を用いた。この (3.3) 式の右辺の第 2 項は、 K の上述の不等式を用いると

$$(3.4) \quad \left| \int_{\partial D_\varepsilon - \partial \bar{D}} K(z, y) g_\varepsilon(x, z) dz \right| \leq O(\varepsilon^2)$$

である。 $\text{dist}(z, \gamma) \leq \varepsilon$ が任意の $z \in \partial D_\varepsilon - \partial \bar{D}$ に對し成立するからである。従って

$$(3.5) \quad \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \varepsilon^{-1} (g_\varepsilon(x, y) - g_0(x, y)) = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \varepsilon^{-1} \int_{\partial \bar{D}_\varepsilon} \frac{\partial g_\varepsilon(x, z)}{\partial \nu_z^\varepsilon} \tilde{g}_0(z, y) dz$$

を得る。 $\tilde{g}_0(z', y) = 0$ for $\forall z' \in \partial \bar{D}_0 \equiv \gamma$ であるから、 $z \in \partial \bar{D}_\varepsilon - \gamma_\varepsilon$ において $z = z' + \varepsilon p(z') \nu_z$ とすると、

$$\tilde{g}_0(z, y) = \varepsilon p(z) \frac{\partial \tilde{g}_0(z', y)}{\partial \nu_z} + O(\varepsilon^2)$$

である。従って、(3.5) に代入すると

$$\begin{aligned} & \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \varepsilon^{-1} (g_\varepsilon(x, y) - g_0(x, y)) \\ &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \varepsilon^{-1} \int_{\gamma_\varepsilon} \varepsilon p(z') \frac{\partial \tilde{g}_0(z', y)}{\partial \nu_z} \frac{\partial g_\varepsilon(x, z)}{\partial \nu_z^\varepsilon} dz \end{aligned}$$

とす。定理 3.1 を証明出来る。

以上の証明には、楕円型方程式の *a priori* 評価、
 グリーン関数の存在、Whitney 拡張定理のみを用いてい
 ら、 n 次元の場合に、(かた Schechter 等の論文 (いた
 properly elliptic な楕円型方程式の場合)にも、証明は
 容易に拡張出来る。詳しくは [7] を御覧いただきたい。

注意、序文中に述べた、我々の定理 1 に極く良く
 似た結果が、Michelitti 氏によつて、既に得られてい
 ること。Univ. Paris Sud. の Sant 教授から御指摘いた
 いただき、同教授に感謝いたします。

文献表

- [1] Arnold, V.I., Modes and quasi-modes. Functional Anal. and its appl. vol. 6, 94-101 (1972).
- [2] Garabedian, P. R.; Partial differential equations. John-Wiley & Sons, New York (1964).
- [3] Hadamard, J.; Memoire sur le probleme d'analyse relatif a l'equilibre des plaques elastiques encastrees. Oeuvres, C.N.R.S. tom 2. 515-631 (1968).
- [4] Uhlenbeck, K., Generic properties of eigen functions. Amer. J. Math. vol. 98. 1057-1078 (1976).
- [5] Garabedian, p.R., & Schiffer., Convexity of domain functionals. J. Anal. Math., vol.2., 281-368 (1978).
- [6] Aomoto, K., Formule variationnelle d'Hadamard et modele euclidien des varietes differentiable plongeées. (to appear in J. Functional analysis)

- [7] Fujiwara & Ozawa, Hadamard's variational formula for the Green functions of some normal elliptic boundary problems. Proc. Japan Acad. 54 A, 215-220 (1978).
- [8] Fujiwara, Tanikawa & Yukita, The spectrum of the Laplacian and boundary perturbation. I. Proc. Japan Acad. vol.54A, 87-91 (1978).
- [9] Ozawa. S., Perturbation of domains and Green kernels of heat equations. Proc. Japan Acad. 54A, 322-325 (1978).
- [10] Micheletti, Perturbazione dello spettro dell'operatore di Laplace, in relazione ad una variazione del campo, Ann. Scuola Normale Sup. Pisa, vol 26. (1972)
- [11] -----, Petrica per famiglie di domini limitati e proprietà generiche degli auto valori, Ann. Scuola Norma. Sup. Pisz, vol. 26, (1973).